
決めたはずの未来 リファイン版

山田サンタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

決めたはずの未来 リファイン版

【Nコード】

N1373L

【作者名】

山田サンタ

【あらすじ】

インドシナ半島を襲った巨大地震。被災した恋人を捜すため現地に飛んだ ぢる。しかしそこでは予想外の展開が・・・

この小説は以前投稿した短編をリファインし再投稿しました。一部追加した話もあり再び楽しんでいただけるとはいいでしょう。尚、登場人物の「ぢる」という女性はインターネットラジオ「ねとらじ」の番組、猫 印のDJさんです。この作品自体、その番組内で朗読して頂いたものを編集いたしました。

今回は各話ごとにイメージする音楽を選んでいきます。是非YouTube等で聴きながら読んでみて下さい。

第一話（前書き）

この小説は以前投稿した短編をリファインし再投稿しました。一部追加した話もあり再び楽しんでいただけるとはいいのではないでしょうか。尚、登場人物の「ぢる」という女性はインターネットラジオ「ねとらじ」の番組、猫 印のDJさんです。この作品自体、その番組内で朗読して頂いたものを編集いたしました。

今回は各話ごとにイメージする音楽を選んでいます。是非YouTube等で聴きながら読んでみて下さい。

あとかきのURLはYouTubeのものです。

それではまた最終話でお会いしましょう。

第一話

> i 6 4 5 6 | 5 1 1 <

いったい誰がこんな結末を予想しただろう？

ぢるはもう一度その記事を見直した。読むというよりただぼっと眺めている

そんな感じであった。

事故死・・・その文字だけが彼女の視界の中心にあった。

今から3年前、ぢるはサイパンのランディングビーチを山田と歩いていた。

「もう2ヶ月になるね。早いものだ・・・」

「まだ2ヶ月よ。私たちの未来はこれからでしょ？」

「そうだね・・・そうだ！僕らの未来を一つだけ決めておかないかい？」

「えっ？ 未来を決めるって・・・どういう意味かな？」

「ずっと先のこと・・・そうだな30年後ってどうかな？ その時

この海岸を

もう一度君と二人で歩く。どう？そんなに難しい事じゃなさそうだろう？」

「素敵・・・約束じゃなくて未来なのね。必ずやってくる・・・」

ぢるは彼の言葉を、光る波のリズムの中で夢のように聴いていた。

その夏も、公園通りの街路樹は歩行者を日差しから守るように覆い茂っていた。

仕事が終わって、いつものようにバスを待っているぢるの前へ1台の車が停まった。

運転席には見覚えのある顔が・・・そう、いつだったか彼の仕事関係のパーティーで

同席した山田の上司だ。

「ぢるさん！大変なんだ。彼の赴任先のベトナムで巨大地震が発生して連絡が

取れなくなってるんだ。僕らはこれから会社で対策本部を作る。君も来たまえ」

その言葉にぢるは動転した。さつき職場でこの地震の臨時ニュースを聞いていたからである。

死者 行方不明者・・・7万人以上・・・

その後の記憶は無く、気づいたのは彼のオフィスの革張りの黒いソファの上だった。

パーティーションの向こうでは慌ただしくスーツ姿の男たちが動き回っている。

「ぢるさん。大丈夫ですか？」先ほどの上司が近づきながら声をかけた。

「はい。彼は・・・大丈夫なんでしょうか？・・・」震える唇からやつと音を出すことが出来た。

「心配要りませんよ。彼ならきつと大丈夫。幸いにも震源地からは80キロ程離れた

地域に居たようです。ただ、まだ安否の確認は出来てないんです。

通信網が壊滅状態らしく・・・」

彼は少し微笑みながらぢるの顔を見ていた。その微笑が今まで身体全体を押さえつけていた何かを取り除いてくれた。

多少引きつった笑みを返したぢるは、オフィスの中央に置かれた大型テレビに目をやった。

NHKの特番が死者9万人と伝えている。

2日後、ぢるはベトナム行き政府チャーター機の窓から、光る太平洋を眺めていた。

ベトナムは山田が赴任する数年前まで、社会主義政権により貿易を制限していた。

それがドイモイ政策によりダム崩壊のように一気に民主化されていくことになる。

とはいっても完全な民主社会ではなく、今回のような出来事がある
と情報が極端に
少なくなる。

首都ハノイ近くのノイバイ空港に到着した際も、機内で長時間待機させられ、日本側との

対応違いを感じざるを得なかった。

「ぢるさんすみませんね、こんなに待たされるなんて……
日本から6時間ほどなのにもうここで4時間も足止めだ、お腹すいてませんか？」

同行している杉田が頭をかきながら政府関係者の方を見た。

「私は大丈夫です。杉田さんこそ何か召し上がってください」

ぢるは窓の外をぼんやりと眺めた。相変わらず軍のトラックが行き来するだけである。

時計を見た……21時。日本時間である。時差はマイナス2時間だ。

19時に時計をセットし直す。

23時。ぢるはホテルの窓から首都ハノイの街を見ていた。

眼下の国道はこんな時間でもオートバイやトラックであふれている。
18階でも聞こえるクラクションの音。ヘッドライトとテールランプが混ざった

国道を見ながら明日の事を考えていた。

> i
6
4
7
8
—
5
1
1
<

第一話（後書き）

こんな曲を聴きながら読んでみて下さい

The Carpenters' Superstar hit
tp://www.youtube.com/watch?v=7
- n1LQEfXx8

第2話

> i 6 4 7 9 — 5 1 1 <

:

翌朝彼らに乗せたバスは被災地を避け、約150キロ北にある彼の赴任先の港町へ

向かっていった。通常でも3時間近くかかるのだが、同乗する政府関係者の説明では

6時間はかかるだろうという。目的地に近づいた頃、ぢるの時計は15時を少し過ぎ
ていた。

震源地から80キロ離れているとはいえ、やはり今回の地震のエネルギーは凄まじ

かったらしく山崩れをあちこちで見かけた。

・・・大丈夫 彼ならきつと無事・・・

ぢるは自分に言い聞かせるようにつぶやいた。

バスは現地の対策本部の置かれたホテルに停められた。

ベトナム政府の説明では、ここに日本人現地就労者や関係者などが集まっているという。

祈るような気持ちでエントランスに向かうぢるの後方から日本語で女性が呼び止めた。

「ぢるさん・・・でいらっしやいますか？私は中川商事の田中とい
います。山田さんの
ことで・・・」

という彼女の名刺をぢるに渡した。

中川商事 ベトナム法人事業部 田中由美子 山田の部下だという。

「やあ由美子君、心配したよ。こっちは全員無事なんだな？」

「すいません部長、連絡できなくて。通信インフラ自体が機能して

いなくて・・・」

「わかつてる。良かったよ元気なんだね。大丈夫かい？・・・それで皆は？」

「ホテルに居ます・・・ただ・・・」そう言うと彼女はぢるの方を見た。

「実は・・・山田所長とはまだ連絡が取れていないんです・・・」

「由美子君・・・それはどういう事なんだね？まさか・・・」

「いえ、所長はあの日、休暇をとって現地の人達と釣りに出かけたそうなんです」

「まさか津波に・・・」ぢるが言い終わる前に由美子が言った。

「中国との国境近くの湖だそうです。だから震源地からずっと離れた場所で・・・」

「由美子君、だとすると帰る手段が無くなっているという事かね？」

「・・・たぶん・・・そうだと思います」話を聞いていたぢるがその場に崩れるようにしゃがみ込んだ。長旅とストレスのせいだ

貧血を起こしたようである。その後ホテルで今後のことについて話し合いがあった。

会社関係者は明日の便で帰国する。ぢるは現地にもうしばらく滞在し彼と一緒に

帰国する。その間の費用・通訳は会社で用意する等々・・・通信インフラは多分あと4～5日で復旧するだろう。

その時のための携帯電話なども用意してくれた。

・・・そして3日が過ぎた。

昼食を取っていると突然ぢるの持っていた携帯電話が鳴った。

「はい。ぢるです・・・」日本の杉田からである。

「携帯電話が通じるようになったようですね。固定電話の復旧はまだのようですが・・・」

ぢるは少し安心した。これできつと彼からの連絡が入るに違いない。この番号は中川商事の現地法人のものだ。

とにかく電話を待とう・・・

しかしその後も日本からの着信は何度かあったが、山田からの連絡はなかった。

そして、さらに2日が過ぎた。ぢるはこのまま待つよりも自分で捜しに行きたい

衝動をやつとの事で抑えていた。が、通訳のティエンの一言で決心がついた。

通訳のティエンとはこの数日ほとんど行動をともししている。

勿論、朝10時から夕方までという契約の範囲ではあるが、こつこつた状況下で

しかも言葉が通じない国にぢる一人で居るということもあり、ティエンの方が

相当気を使ってくれているようで、自然に会話の量も増えていた。ティエンの話では

彼は過去に7年間、名古屋に留学生として住んでいたという。

電子工学を専攻したが山田の会社では、主にジェットロと日本企業からの依頼で

現地調査を任されている。時々ジョークを交える彼の話はぢるにとつて安らぎになって

いる。

ぢるはティエンに山田を捜しに行きたい旨を伝えた。

「ぢるさん、私もその方が良いと思います。山田さんはきつとヤンモー湖の付近に

居るはずですよ。明日にでも車を用意しますよ。4輪駆動車だから心配ない。」

彼はそう言うにつこり笑った。

翌朝7時にロビーで待ち合すことを約束し、ティエンはホテルを後にした。

> i
6
4
5
7
—
5
1
1
<

:

第2話(後書き)

N h o H u e V ? n K h ? n h ?
w w w . y o u t u b e . c o m / w a t c h ? v " H - 7 t 5 a
f W i M 0 & a m p ; f e a t u r e " p l a y e r | e m b e d
d e d # !

第3話

> i 6 4 5 9 | 5 1 1 <

:

「ぢるさんは山田さんと付合って、どれくらいになるんですか？」
運転しながらティエンが話しかけてきた。

ヤンモー湖に向かう県道はお世辞にも整備されているとは言えず、
舗装されていない

赤土の道路は穴だらけである。それでも40〜50キロでヒュンダ
イ製の4WDは
走っていた。

「アイン・ティエンあとどれくらいでヤンモー湖に到着するの？」
ぢるはあえて

アインとこちらの言葉を使った。「ぢるさん、言葉を少し覚えまし
たね。」

どんな言葉覚ええました？」

「そうねー、ホテルはカックサンでしょ？ あと車はセ・オートだ
つけ？・・・」

「じゃあ恋人は？」

「・・・わからない・・・」

「イエウ。ゴイ・イエウって言いますよ・・・」ティエンが笑いなが
らぢるの方を見た。

そんな会話をしながら40キロほど走ったところで、道路が30c
m程突起していた。

「ぢるさん、ここからは時間がかかりそうです・・・」慎重にハンド
ル廻しながら

ティエンはヒュンダイを操っている。これではバスは勿論、普通の
車も無理だ。

ぢるは自分が捜索に向かったことを正しかったと心底おもった。

「ティエンさん、大丈夫？少し休憩しましょうよ……」

道路の状態は最悪であった。今回の地震の影響で、かなりのダメージを受けている上に

上流で川が氾濫したためかこの辺りまで水が来ており、時々道路を10cmほど隠してしまっている。

「ぢるさん、これはどうやら崖崩れか何かで川の流れが変わってしまたんでしょう。」

この先に村がありますから、そこで情報を聞いてみます。」

「もう2時間以上運転しているわ。そこでちよつと休みましょう」暫らく走り車は海沿いの集落ティエン・イエんに止まった。

民家は数十世帯あるようだが、人はあまり出ていない。

「ぢるさん、ボクはその家で色々聞いてきますから車で待っていて下さい」

そう言うとティエンは民家の方へ歩き出した。

ぢるはこの国の田舎の民家を初めて目にした。なんとなく昔の日本と似ていると思った。

「ぢるさん、やはりヤンモー湖の付近で大きな山崩れがあったようです。」

けが人は居ないようですが、この先はひよつとすると車が走れないかも……」

戻ってきたティエンの顔は少し強張っていた。

「そうですか……でも状況が分かっただけでも安心しました」

「とにかく行ける所まで行ってみましょう！」

二人は持ってきた缶コーヒを飲みながら地図を広げた。

ちよつと甘すぎる缶コーヒを飲み終えた二人は、川沿いの道をヤンモー湖に向け走った。

車の時計はすでに10時半になっている。

相変わらず慎重な運転で、スピードメーターは40キロを超えるこ

とはないようである。

「ぢるさん、何か音楽でも流しましょうか？」そういつとティエンはカーステレオのスイッチを入れると、聞き覚えのある曲が流れた。

「この曲・・・知ってます。彼が前回帰国した時歌ってくれました。」

えっと、モツカ・・・」

「モツ・カック・タム・ティン・グオイ・ハーティンです」彼はゆつくりと言った。

「どんな歌なんですか？恋愛の歌？」

「この曲は・・・昔、戦争がありました。そして大勢の人が死にました。」

そんなことがあっても海や山は何も変わっていない・・・という意味のこと歌っています」

話を聞いて、山田が何か物思いにふけるような目をして歌っていたのを思い出した。

戦争の歴史。ぢるはこの国であった悲惨な歴史が、何か日本と似ているような気がした。

車は約1時間ほど走り、ヤンタムという集落に着いた。ここから先はどうも車は無理のようである。迂回路があるか地元の人に聞いてくると言っ

てティエンは車を離れた。

山間の集落は先ほどの村と違い、かなり貧しい感じがした。

子供たちの着ているものが全然違っている。

「ぢるさん！ちよつと降りましょう。事情を説明したら、この家の人がこれから

昼食だから一緒に食べようと誘ってくれました。さあ、行きましょう。」

ぢるはびっくりした。それほど豊かでは無いのにそんなことをしてくれる人達・・・

「でも、いいんでしょうか？私なんかが行っても・・・」

「いいんですよ。逆に断ってはかえって失礼ですから。この国の人は年長者の意見には

素直に従いますよ」

初めて入る異国の家庭。ぢるは少しドキドキしながら玄関を入っていった。

昼食は豪華ではないがとても美味しく、もっと食べなさいと家の主人が言っているのがわかった。

「シン・カムオン！」ぢるはありがとう、とこの国の言葉で言った。それを聞いて家族中から拍手があった。7人がそれぞれぢるに話しかけてきたがすまなさそうにしているぢるを見てティエンに何か言っている。

「ぢるさんが言葉を話せると思ったみたいですよ。発音が良かったみたいです。」

そう言うと彼は笑った。

ティエンはヤンモー湖について家族に尋ねていた。それによると、ヤンモーは中国の

国境にある小さな湖で、ここから歩いて2時間ほどである。

山田らは国境を越え、チワン族自治区行った可能性がある。

なぜなら中国側の方が工業都市が近くにあり、食料や医薬品が買いやすい。

車も向こう側へなら簡単に行ける筈である。

「ぢるさん、たぶん山田さんは中国に居ますよ。ただ問題は距離です」

「そんなに遠いんですか？」

「中国まではさっき話したとおり約2〜3時間です。しかし、そこから中国の

ちよつとした街まで歩いてだと5時間。そうなるともう夜になってしまつ。

しかもボクは中国語もチワン語も話せません」

「そうですか……」ぢるはこれはしかたがないと思った。

テイエンが家の主人と何やら話している。そしてぢるに言った。

「とりあえず今日はヤンモー湖の様子を見に行きましょう。夜はこちらの家に

泊まらせてもらいます。そして明日ご主人と一緒にチワン自治区に行き山田さんを

捜します。ご主人はチワン語が話せるそうですよ。」

テイエンがそう言うと家の主人は誇らしげに胸をたたいて笑った。

ぢるは涙が頬をつたわるのを感じていた。

:

:

> i 6 4 6 0 | 5 1 1 <

第3話(後書き)

M o t K h u c T a m T i n h N g u o i H a T i
n h V a n K h a n h
h t t p : / / w w w . y o u t u b e . c o m / w a t c h ? v
" 8 t X K q J 8 e Q 3 3 Y

第4話

> i 6 4 6 1 — 5 1 1 <

:

昼食後2人はヤンモー湖に向かった。なだらかな山道を歩いていると何人かの

地元の人たちが声をかけてくる。皆親切で、この果物を持って行けなどと日本では

考えられないような体験である。

通訳のティエンもそうだが、この国で出会った人々はすべて優しい。ぢるは彼の安否が気になるものの、心は少し温かった。

「ぢるさん、あれがヤンモー湖です」ティエンが山間から数キロ先の湖を指差した。

二人の足は自然と速くなり、少し行くと中国側も見えてきた。

「ぢるさん ああの辺りがチワン自治区です。結構都会でしょ？」
確かにベトナム側の何もなさに比べてそれは明らかに街である。大きな工場もいくつか見える。

「国境を越えるのに手続きは要らないんですか？」ぢるは少し不安げに聞いてみた。

「ここは東南アジアへの唯一の接点です。ですから毎日多くの車が行き来します。

そのため高速道路のゲート以外は何の手続きも要りません。但し、日帰りに限りですが」

彼の話では50キロほど南には、ベトナム・中国を結ぶ高速道路も出来ていて帰りは

そちらから廻るつもりらしい。1時間ほどしてヤンモー湖に到着し

だが、とても近づける状態ではなかった。

山崩れのため水位が10mほど上昇し道路など皆無だ。なるほどの状態ならば

中国側へ逃げる方がが賢明であつただろう。

納得した2人は先ほどの村に引き返さず事にした。時計は3時になっている。

二人が村に戻つたのは5時を少し回っていた。話を聞きつけた村人たちが、何人も

ぢる達を迎えてくれている。身体は疲れているはずだが嬉しさでも感じなかった。

「食事の用意が出来ているそうです。行きましょう」

食卓では先ほどの7人以外に、彼らの親戚なども居り、ぢるたちを合わせ13人になつていた。

木製の簡素なテーブルには昼とは違いパーティーのように食事が盛り付けられている。

「さあ、ご馳走になりましょう。」家の主人が何か言つと一斉に箸をすすめた。

「美味しいです！ねえ、ティエンさん。何ていえばいいの？」ぢるは笑いながら

話しかけた。

「ザツ・ゴンでもゴン・ラムでいいですよ。美味しいでしょ？これもどうぞ」

と言って魚を揚げたものをとってくれた。

食事が終わった頃、家の主人が歌を披露してくれると言って民謡を歌いだした。

皆が手拍子をし主人を盛り上げている。ティエンは車からギターを持ってきた。

そんな感じで3時間近く楽しい時間をすごした頃、皆がぢるの歌が

聴きたいと

言うので1曲披露することにした。

「ぢるさん、何を歌いますか？」ティエンが笑いながら聞いた。

「それじゃあ……おぼろ月夜」

「その曲なら知ってます！伴奏しましょう」

この日、ぢるは久しぶりにぐっすりと眠ることができた。

：

> i 6 4 6 2 | 5 1 1 <

第4話(後書き)

B e a u t y P l a y s T r a d i t i o n a l V i e t n
a m e s e M u s i c
h t t p : / / w w w . y o u t u b e . c o m / w a t c h ? v
" o n h g C U k O L E A

第5話

> i 6 4 6 3 — 5 1 1 <

:

翌朝、家の主人ティンと一緒に中国の国境を目指した。

昨日とは違うルートである。

ちよつと山道を通るが40分以上早く着くという。ティンは3ヶ月に一度は

中国側へ行くらしい。買い物などベトナムより便利なのだそうだ。

1時間半で国境を越えた。チワン自治区はかなり大きな街である。

車も結構走っている。

ティンが近くに居た現地の人に何か話しかけている。戻ってきてティエンに話しかけた。

「ぢるさん、ここからはタクシーを使いましょう。自治区の中心まで行けば何とか

なりそうです」

ぢるは始めて見る中国の風景に少し驚いていた。テレビなどで観るのとは少し

違うような気がする。とにかく道幅が広い。人が少なく見えるほど広い。

ティンにタクシーをひろってもらい目的地を説明してもらった。

自治区中心部に行けばベトナム語も通じるらしい。ティンとはそこで別れる事にした。

ぢるは心から感謝を伝え、涙をぬぐいながらタクシーに乗り目的地を目指した。

都市部までは約1時間の道程である。

タクシーの運転手がなにやら話しかけてくるがぢるは勿論、ティエンも困った顔をして

している。

「英語でも通じれば良いんですけどね・・・」ティエンが苦笑した。ぢるは少し眠くなり、そのうち軽い寝息をたてていた。

「着きましたよぢるさん」ティエンの声で目が覚め周りを見渡した。自治区中心部は想像以上に大きな街である。

車を降りた二人は銀行へ向かった。この辺りは両国の貿易が盛んだ。当然両替が必要で、銀行には両国語を話せる者がいる。

中国銀行と書かれた建物に近づくと、思ったとおり道端にベトナム人ブローカー

らしき女性たちが座っていた。

「ぢるさん、彼女たちに通訳を探してもらいます。ちょっと待つててください。」

そう言うとティエンは小太りの女性に近づいていった。暫くして女性と戻ってきて

ぢるに話かけた。

「ぢるさん、この人が今日一日通訳をしてくれるそうです。リーさんって言います。」

リーはぢるが日本人だと知ると、ティエンにぢるのことをいろいろ聞いていた。

なんでも以前日本人と付き合いってたらしく、少し日本語が話せるといふ。

「あなた恋人きつと見つかる。私助けるよ」リーがぢるに言った。ぢるはまた心が熱くなるのを感じていた。

3人はまずタクシー会社を訪ね、あの日ヤンモー湖方面からの客があつたかなど

いろいろ尋ねてみた。

チワン自治区にタクシー会社はここだけである。半国営でドライバーの中には

軍人も居るそうだ。

ベトナムの大地震の日、ヤンモー湖から長距離を利用した客の資料が出てきた。

ただ不思議な事にドンシン市には来ず途中の村で降りたという。

「ぢるさん、僕達は大変な思い違いをしていたのかもしれませんが」
ティエンが言った。

「どういうこと？」ティエンの少し困ったような顔に不安になり、
ぢるはわけが

解らず問いかけた。

「つまり、山田さんたちは被災して逃げたのではなく、ひょっとす
るとある目的で

中国側に来ていた可能性が・・・」

「それなら、なぜ会社に連絡しないの？・・・だって・・・」

「貴女には言いますが・・・実は山田さんはこちらで別の仕事もして
いるのです。」

それは・・・自分の会社です」

「そんな話一度も聞いたことないです。・・・どうして私にまで
隠して・・・」

「それは解りませんが、私は山田さんに誘われていますので。この
話は中川商事の

人間には絶対言わないでください！」

ティエンはその経緯をぢるに話した。詳細はこうである。

山田はベトナムが気に入っており、できればこちらに住みたいらしい。
い。

そのためにこちらで自分の会社を設立したい。しかしベトナムの法
律で簡単には

不動産などの取得が出来ない。

そこで、ベトナム人の友人に法人を作らせ、自分が裏のオーナーと
して運営する。

現在社員は5名おり、ティエンも来年には手伝って欲しい・・・と。
話を聞いてぢるは落胆した。山田がこれほど大事な話を何故私にし
なかつたのか？

もし聞いたとしても自分が賛成しないと云ったら？

「テイエンさん。彼が行きそうなところが解るの？ わたし、どうしても彼に会わなきゃ・・・」

言い切らないうちにぢるは泣き出してしまった。

リーがぢるの肩にそっと手を置き「どうした？ 悲しいことあったか？」と心配そうに

声をかける。

「ぢるさん、とにかく山田さんを見つけましょう！ 心当たりがあります・・・」

テイエンはぢるを元気付けようと勤めて明るいい顔で言った。

「ありがとう。ごめんね、泣いたりして。リーさんもありがとう」
ぢるは涙を拭きながら二人に言った。次の目的地はベトナムのランソンだ。

ナータオ村に戻り停めてある車で向かうことにした。ランソンと聞いてリーも

一緒に行くと言い出した。妹が住んでいるのだそうだ。

テイエンとぢるは快く承諾した。

第5話（後書き）

楊貴妃 ウイ・ルーション
? 汝俊

http://www.youtube.com/watch?v=
=FLAIdOrH-cM&feature=relat
ed

第6話

丁度昼になっていたので、3人は食事をするために地元で評判の魚料理の店に入った。

見たことも無いような大きなエビがテーブルに運ばれた。バターをふんだんに使いとても美味しい。

食事を終えた3人はタクシーを拾い、ヤンモー湖に向かった。

途中リーが日本のことを色々訪ねてきた。彼女は10年ほど前旅行に来ていた

日本人と恋に落ち、一時は本気で日本に行くことを考えたほどだったらしい。

しかしその当時、日本はベトナムからの入国を厳しく制限していた。同じ東南アジア諸国から売春を目的に、多くの少女達が流入したからである。

「今、日本にはたくさんの方のベトナムの人が住んでいます。働いている人も多いんですよ」

ぢるはゆつくり、リーに言った。確かにぢるの言つとおり多くのベトナム人就労者が

居る、がほとんどは研修生という名目で月8万ほどで働いていた。

しかも、日本に行くにはびっくりするような借金をしなくては無理である。

事情を知っているティエンは黙って聞いていた。

タクシーが 中国側ヤンモー湖に到着する頃には4時近くになっており、そこから

歩いて1時間半、ナータオ村に着く頃には日が沈みかけていた。

3人はティン一家に挨拶をしランソンに向かうことにした。

ぢるはティンに中国で買ったお土産を渡し、再会を約束してナータオ村を後にした。

途中チエン・イエンまで来ると携帯電話が使えるようになり、ティエンは中川商事に確認の電話を入れていた。

山田からの連絡はまだ無いという。

「もし彼がランソンに居るなら携帯電話が通じるはずだし、何か連絡すると思います。」

「おかしいな?」

ティエンがぢるの顔をチラッと見た。後ろのシートではリーがすっかり眠っている。

「ねえティエンさん。ランソンは大きい街なの?」

「そうですね。最近中国側との高速のおかげで賑やかになってきました。」

町並みは昔からあまり変わってませんが、倉庫や物流のための施設が増えましたね」

ティエンは何か考えているようだ。

チエン・イエンからランソンまでの道は地震の影響を受けておらずスムーズに走行できた。

走行距離は150キロほどである。このペースでも3時間近くかかるだろう。

「ティエンさん恋人は居ないんですか?」
ぢるの質問にびっくりしたようにティエンは振り向いた。

「寝てるのかなと思いましたよ。いいんですよ寝てください」

「だって、さつき眠ったから大丈夫。ティエンさんこそ疲れてません?」

「疲れたら途中で止まりますから、大丈夫です。そうそう恋人は実は日本に居るんですよ」

ティエンの意外な言葉にぢるはびっくりした。

「そうなんだ・・・日本人なの?」

「ええ、名古屋でアルバイトしてた時に知り合った女性です。でももう1年も会って」

ません……」

ティエンは少し寂しそうな顔をしている。

「ティエンさんはどなたところでバイトしてたんですか？女の子と知り合うなんて

飲食店？」

「そうです。ベトナム料理店で働いていました。女性はアオザイを着ていましたよ」

「日本人が？スタイルが良くないと働けないですね。私には無理だわ……」

そう言つとぢるは笑った。

「そんな事無いですよ。ぢるさんは綺麗だしスタイルもすばらしい！きつとアオザイが

似合いますよ。そうだ！山田さんが見つかったらアオザイを作りに行く和良好的よ。

2日ですてきから

「すてき……」ティエンの言葉にちよつと顔が熱くなっていた。

車の時計はもう9時を過ぎていた。ステレオからはJAZZが流れていた。

:

> i 6 4 6 4 | 5 1 1 <

第6話(後書き)

Just the two of us
Grover Was
hington, Jr.
http://www.youtube.com/watch?v
"sARB0ni3B2Y&feature=relat
ed

第7話

「そろそろ休憩したほうが良いんじゃない？」チエン・イエンで食事を取って以来

運転し続けているティエンを気遣い、ぢるが言った。

「ぢるさんもう少しでランソンです。このまま一気に行きましょう。さつきホテルの

予約はしましたから」

チエン・イエンで何箇所かに電話しているのをぢるは聞いていた。

予約はその時していたのであろう。1時間ほど走りランソン市内に入った。

リーの妹が居るというドンキン市場の近くのアパートに寄り、翌朝の約束をして二人は

ホアン・ニャンホテルに向かった。夜12時前だというのに街は賑やかである。

ホテルはそれほどきれいではないが、設備は整っていた。明日は10時にロビーでリーと

待ち合わせである。ぢるは疲れていたがなかなか眠れないので、自動販売機でビールを

買うことにした。

1Fのロビーに下りるとティエンもビールを買っていた。

「ぢるさん、お酒飲めるんですか？一度も飲んでるの見たこと無かったですよ」

ティエンが笑いながら言った。

「なんだか眠れなくて・・・どれが美味しいんですか？ これかしら？」

ぢるがティエンと同じビールを押しそうとするとティエンが言った。

「それならここのバーで飲みませんか？ 少しお腹も空いていたんで」

ぢるは頷いた。

ホテルのバーは5つのテーブル席とカウンターがあり、ウォールナツト仕上げの

上品なカウンターに二人は座った。

「ぢるさんはビールが良いですか？カクテルも出来ますよ」

ティエンが写真つきのメニューを見せてくれた。

「じゃあ・・・この綺麗なカクテルを・・・」

「いいですね。それはネプモイと言って米から出来た焼酎のようなお酒をジューズで

割ったものです。じゃあボクはバーバーバーね」

バーバーバーとは333というラベルの日本でもお馴染みのビールである。

二人の前に飲み物が出された。

「わあー キレイ・・・」オレンジ色のベースに透明のクラッシユゼリーが乗せてあり

ミントの葉が飾られている。

「じゃあ明日、山田さんが見つかることを祈って乾杯！」

ティエンがグラスを持ち上げた。

「ティエンさん、山田はどうして会社やあなたに連絡しようと思わないのかしら？」

30分ほど話していてあらためてティエンに聞いてみた。

「それは・・・ボクにも解りません。電話が出来ない状態・・・言いかけてティエンは口をつぐんだ。

「電話が出来ない。そんなことあるのかしら？」

「この国は電波事情がとても悪いです。少し山間部に行くともう使えませんが・・・」

たぶんそれが原因じゃないかと・・・」

不安げなぢるを氣遣ったのかもしれないが、とにかくティエンの言葉を信じるしかない。

ぢるはそう思った。

v
6
4
6
7
|
5
1
1
1
<

:

第7話（後書き）

N g o i s a o t r a n g - A k i r a P h a n
h t t p : / w w w . y o u t u b e . c o m / w a t c h ?
v " w v c e x b K S p j U & a m p ; f e a t u r e " r e l i a
t e d

第8話

> i 6 4 7 1 — 5 1 1 <

:

翌朝、ホテルに来た リーと一緒にランソン市内のタクシー会社に出向いき

重大な事実を聞かされた。ナーラムから日本人を含め3人の客を乗せた運転手が居る

というのだ。

「それだ！」ティエンがその運転手に話を聞きたいと言うと、丁度外で車を洗っているようである。

「ぢるさん、きっと何かわかりますよ！」一緒に来た リーも心配げである。

運転手の話では地震当日、中国から来た客をナーラムに送った帰りに幸運にもランソン

までの客を見つけ、彼らをそのままドンタン駅で降ろしたというのだ。

「ドンタン駅には中国からの電車が来ています。やはり・・・」ティエンは運転手に彼らがどこへ行くと言っていたか聞いてみた。

はつきりとは分からないが、客の話の中で何度もニンミンという中国の街の名前が出たという。

ニンミンはドンタン駅から2時間ほどの町である。

「とにかくニンミンに行ってみましょう。ドンタンまでお願いします」

ティエンは運転手に言った。幸いぢるのパスポートは帰りのトランシットに備え

中国のビザを取ってある。3人はドンタン駅から再び中国ニンミンに向かった。切符の手配などはリーがやってくれた。電車の中で今後の事について話し合う。

まずニンミンの駅でホテルなどがあるかを確認する。それほど大きく無い街なので

中川商事とつながりのある企業が無いか？タクシー会社で日本人を乗せたか確認する・・・等々。

リーが中国語を話せるので大変助かっている。しかもリーは中国用の携帯電話の

チップも持っていた。

「リーさんが居てくれてよかったわ」ぢるは改めて出会いの大切さを感じていた。

駅から出るとタクシーが一台だけ停まっていた。駅は市街から少し離れた

場所にある。

3人がタクシーに乗り込むと運転手が何か言っている。ぢるがリーに聞くと

「今日お祭り。車入れないところある、言ってる」リーがそう言っていると運転手が

さらに何か言った。リーがティエンに通訳して話した。

「ぢるさん、運転手が僕達が日本語を使ったのを聞いて、たまに日本人を乗せると

言ったそうです。もしかすると・・・もう少し詳しく聞いてます」と言ってみてリーに話しかけた。

「ぢるさん、中国でもこの辺りは日本人が少ないです。とにかくその日本人を

よく乗せるという建物へ行ってもらいましょう」

ほんの少し希望が見えたぢるであった。

ニンミンは比較的整備され、町並みはどこかヨーロッパを感じさせ

る。

タクシーの案内でその日本人をよく乗せるという建物の前に車を停めた。

「ぢるさんここだそうです。中に入ってみましょう」テイエンの言葉に鼓動が

早くなった。

ジェイ・コーポレーション

J・c o r p o r a t i o n 中国にしては珍しい英語表記の看板のついた3階建て、エントランスは大理石である。

分厚いガラスの扉を開けると受付用のカウンターが置いてある。

パーテーションを隔てた事務所から麻の白いスーツを着た50前後に男が

出てきた。

「どちらさま？」男は日本語で3人に話しかけた。それを聞いたテイエンが

名刺を出し日本風に挨拶をした。

「私は中川商事のグエン・タイン・テイエンです。初めまして。実は中川商事の

山田所長のことをご存じないかと思ひまして・・・」

テイエンがそう言うと男は3人を奥の応接室に案内した。

「皆さん中川商事の方？」男は名刺を出しながらぢるの方に向かって言った。

名刺にはJ・c o r p o r a t i o n 後藤俊と書いてある。

「いえ・・・私は山田の婚約者です。今回の地震で心配になりこちらに来ました」

ぢるがそう言うと男は心配そうに言った。

「それはそれは・・・しかし地震はベトナムでしょ？ 何故こちらに？」

テイエンが経緯を説明した。

「なるほど・・・お困りですな。だが申し訳ないが山田さんの事は存じ上げません」

「この辺りで日本人を見かけたことはありませんか？」

ぢるがすぎるように言ったが、結局ここでは有力な手がかりは得られないかった。

そう思いながら事務所を出ようとした時・・・ぢるがあるものに気づいた。

しかしその事には触れず建物をあとにした。

「テイエンさん山田はやっぱりここに來てるわ！」タクシーに乗ったぢるが

テイエンに言った。

「ぢるさんも気づきましたか？・・・あの携帯電話には見覚えがあります」

事務所の机の一つに置いてあったドコモのプレミニの事である。

山田は海外に行く時携帯を2台持っていく。

1台はノキア。もう1台はこのプレミニである。

これは国内専用で、海外ローミングには対応していない。

それがこの中国にある。「ぢるさん・・・やはり山田さんは何かトラブルに巻き込まれて

います。しばらく張り込みましょう」

ぢるは先ほどの建物をじっと見つめた。

> i 6 4 7 2 — 5 1 1 <

第8話(後書き)

S o W h a t - J o n h C o l t r a n e a n d M i
l e s D a v i s
h t t p : / / w w w . y o u t u b e . c o m / w a t c h ? v
e d " R j w V w A S l V n 4 & a m p ; f e a t u r e " r e l a t

第9話

港に近い物流倉庫の3階・・・
チンピラ風の男が3人、男を取り囲むように座っている。

「もういい加減に話したらどうなんだ。そのうち痛い目にあうぜ・・・」

黄色いTシャツを着た男が言った。

「そうですね・・・我々も決してあなたに危害を加えようなんて思っちやいない・・・」

ただね、我々も仕事なんですよ。ちゃんと話してもらわないと命の保障は出来かね

ますがね」

「いったい俺が何をしたって言うんだ!？」

「だから・・・例のカバンがどこにあるかだけ分かれば私ら帰りますんで・・・」

言ってもらえませんか？山田さん」

そういうと黄色いTシャツの男が山田の腹部に蹴りを入れる。

「うぐっ・・・」椅子に縛り付けられた山田が呻いた。

ここに監禁されてからもう5日である。

まさか友人だと思っていた田中がこんな事をするなんて・・・

田中との出会いは1年前の事である。中川商事の創立30周年コンペにゲストとして

招かれていた。当時の田中は羽振りがよく、その後何度か梅田のクラブにつれて

行かれた。山田は酒は嫌いではないがクラブなどはあまり好きではない。

しかし中川商事にとって田中の会社は情報源としての価値があった。飲みに行くうち、より親しくなり今回のベトナム赴任後も数回現地で遊んだりもした。

しかし彼の会社に数億の負債があることを山田が知ってしまうと、田中の態度は一変した。

「田中、オレはいつたいどうなるんだ？殺されるのか？」田中を睨みつけながら言った。

「それは、君次第だな・・・」そう言うと田中は階段を降りていった。

> i 6 4 7 3 — 5 1 1 <

タクシーの中で2時間ほど待っていると1台のポルシェ・カイエンが建物の前に停まった。

「ぢるさん今停まった車から降りた男を知ってます！・・・確か・・・中西だったと・・・」

以前ティエンが山田に呼ばれ、田中という男と一緒にリゾート地の視察に行ったことがあるという。

なかなか羽振りの良さそうな男で、帰りに寄ったクラブでは大金を使っていた。

その時この中西が途中から合流してきたというのだ。どうも田中の子分という感じだったらしい。

「何で中西がこんなところに居るんだろう？きっと何か知っているに違いない。

ぢるさん、もうしばらく様子を見てみましょう」

それから1時間程して、建物の中から後藤と中西が一緒に出てきた。二人は前に

停めてあった車に乗り込むと出かけた。

「後を追いましょう・・・」ぢるの言葉にティエンは首を横に振った。

「ぢるさん 大都市ならまだしもこんな町で尾行したら怪しまれます。」

それよりもこれで後藤と田中に関係があることがわかりました。田中のことは調べればすぐ分かります。

一度ホテルに戻りましょう。ボクも事務所で調べたいことがあります」

リーとはランソンで別れ、再びハイフォンにあるホテルに到着した頃にはすでに

深夜になっていた。

翌日、ホテルのレストランで昼食をとっているとティエンから電話があった。

「ぢるさん 田中の居場所がわかりました。彼は今この国に居ます」
3時にロビーで待ち合わせ、2人は田中が居るといふホテルに向かった。

「ぢるさん、ボクは田中に顔を知られています・・・これが田中の写真です」

そう言うってリゾート地を視察に行った時撮った写真をぢるに見せた。

「わかりました・・・私にいい考えがあるわ。 きつとうまくいく・・・」

「ぢるさん、くれぐれも無理はしないように」ティエンが心配げに言った。

田中はベトナムの首都ハノイに居た。Fホテルというディスコやカラオケバーを備えた・・・見方によれば売春斡旋を公認しているホテルに宿泊している。

「ぢるさん何かあったら必ず電話してください。ボクは事務所に居ますか」

「大丈夫心配しないで。」ぢるはそう言うのとホテルに入っていた。
「アイハブ・ノーリザベイション・・・ドゥユーハブ・・・」ぢるが
言いかけると

フロントが笑顔で「日本語大丈夫ですよ。ご一泊ですか？」

「すみません1泊です・・・」パスポートを提出し名簿に記入した
ぢるは、フロントに

こちらに日本から来ている田中という男はいるかを尋ねた。

「8025号室です。お繋ぎしますか？」ぢるは後で自分で電話するからと言って

エレベーターに乗った。

7012号室・・・ ぢるの部屋は田中の1階下である。

一息つくくと8025号室に向かった。緊張で震える指でチャイムを鳴らす。

「だれ？」ドアを開けるなり男が言った。

「すつ、すみません。お友達の部屋と間違えちゃって・・・ごめんなさい！」

「そうなんですか・・・日本から？こんな時期に旅行ですか？」

「いえ・・・友人の家に遊びに来てたら震災で・・・電気とか使えなくなつて・・・

で、ホテルに泊まっているんです」ぢるはそう言うにつっこり笑った。

「それは大変でしたね。お友達は何号室？」

「7025号室です・・・一階下でしたね・・・あつ、この近くに日本語が通じる

レストラン知りませんか？今夜お友達が外出しちゃうから・・・

私、言葉が話せなくなつて・・・」ぢるがそう言うつと

「じゃあ、もしよかつたら一緒に食事しませんか？いいお店知ってるんですよ」

ぢるの思ったとおり男は乗ってきた。

部屋に戻りティエンに経緯を説明した。

心配するティエンに携帯で必ず連絡を入れることをぢるは約束した。

第9話(後書き)

George Benson Quartet - Summer
time
<http://www.youtube.com/watch?v=1EjJL6CYBJI>

第10話

> i 6 4 8 1 | 5 1 1 <

:

6時になりぢると田中は待ち合わせをしたロビーから出て、タクシ
ーに乗った。

レストランはホテルからそう離れていない場所にあるヨーロッパ風
のレンガ造りだった。

「ぢるさんは嫌いなものはありませんか？ この店はカニが美味し
いんですよ」

「大丈夫です。カニって、タラバとかそうなの？」

「ちよつと違いますね。クア・ロット。日本ではソフトシエルクラ
ブという名前でしたまに

見かけますが脱皮したばかりのカニ・・・多分渡り蟹を殻ごと食べる
料理です。

美味しいですよ。」

「殻ごと食べるんですか？ どんな味だろう？・・・」

「月夜のカニって呼ばれてるんですよ。ほらきました、揚げたてを
食べましょう」

カニは少し泥臭かったが味は美味しかった。お酒も少し入ったとこ
ろでぢるは言った。

「田中さんはしばらくこちらに滞在されるんですか？お仕事なんで
すよね？」

「ええ、ちよつと仕事で。しばらく居ますよ。ぢるさんは色んなと
ころ行きました？」

よかったら案内しますよ。」

「ホントですか！ 明日も独りなんですよ」

「じゃあ是非。二人の出会いに乾杯！」

二人はレストランを出たあとホテルのバーで飲んでいた。「ぢるさん恋人は居ないんですか？」田中が聞いてきた。ぢるを口説く気であるう。

どちらかというところぢるの嫌いなタイプである。年齢は50前後、小太りで声が大きい。

日本のレストランなら絶対に同席したくないはずであるが、山田のためである。

「恋人ですか・居るのかな？どっちだろ・どう思いますか？」

「きつと居ますね。でも最近うまくいってない・・・そんな感じかな？」

「・・・・わかります？」ぢるはそう言ってグラスに唇を近づけた・

・

時間は11時を廻っている。

バーで飲んでる間に仕事の事を色々聞き出した。

それにより最近はどこで仕事をしているのかがわかった。

ハイフォンで仕事をしているという。

「ハイフォンですかあ。一度行ってみたいな」

「よかつたら明日行きますか？途中ちよつと用事があるのでコー

ヒーでも飲んでて

もらって・・・」

田中は良かつたら部屋で飲みなおさないかと誘ってきたが、友達が遅くに戻ってくる

かもしれないと明日の約束だけをしてバーを出た。

部屋に戻ったぢるはすぐにティエンに明日の事を伝えた。

「わかりました。ぢるさんボクが尾行しています。念のために時々連絡してください」

翌日10時にロビーで待ち合わせていた田中とタクシーに乗った。少し離れてテイエンのヒュンダイが後をつけている。ハイフォンまでの道路は結構込んでいた。昼前タクシーはハイフォン市内に入った。

「ぢるさん、私は少し用がありますのでこの店でお茶でも飲んでいていただけますか。」

30分くらいで戻りますよ」

コーヒーショップでぢるを降ろし、タクシーは走り出した。

5台後ろをテイエンの車が追っている。

ぢるはコーヒーショップに入りテイエンに電話した。

「ぢるさん？今追跡しています。尻尾を出せばいいんですが……」

「30分で戻ると言っていたわ。そんなに遠くないと思うの」

「わかりました。また連絡します」ぢるは電話を切りコーヒーを一口飲んだ。

苦いコーヒーだった。

> i 6 4 8 5 — 5 1 1 <

第10話(後書き)

Ma i Ye u - M y T a m
h t t p : / / w w w . y o u t u b e . c o m / w a t c h ? v
e d " K N f l i p 3 I N B r M & a m p ; f e a t u r e " r e l a t

第11話

> i 6 4 8 7 — 5 1 1 <

「おい。白状したか？ 中西……」

「あっ、田中さん。おはようございます。なかなか口を割らないんですよコイツ……」

「なあ山田さん。このままだとあんた死ぬ事になるぜ……」そういって山田の顔を殴った。

「俺には何の話かわからないんだ……カバンって何の話だ？」

山田がすぎるように言った。すでに相当衰弱している。食事は与えられてはいるがもう限界である。

「そこまで言うなら……仕方ない。明日には死んでもらう」そう言うと

田中は降りていった。

タクシーが倉庫から出て行く。それを見てティエンが車から降り倉庫に近づいた。

「ぢるさん、出来るだけ時間を稼いでください」携帯でそう伝えると倉庫に入った。

「山田さん……あんたも強情な人だ。命と引き換えに金を守るのか？馬鹿なやつだ」

「教えてくれ！カバンって何のことだ？……金っていったい……」

「まだ そんなことを……50億の証券の入ったカバンの事だよ……」

この時初めて金のことを中西が口にした。

「本当に知らないんだ。たのむ助けてくれ！」

「田中さんにあんたの始末をつけるように言われているんだ。明日の朝には楽になれる」

「なぜ俺が殺されなきゃならないんだ？……」山田は中西を睨みつけた……

と、その視線の先にティエンの姿が映った。

ティエンはゆっくりうなずき山田に合図を送った。

「わかった……カバンの在りかを話す……」山田は中西の注意を引くため
小声で言った。

「……やつと話す気になったか」その時すでに中西のすぐ後ろにいたティエンが

角材を首筋に振り落とすと、小さなうめき声を上げ中西は床に崩れ落ちた。

「山田さん大丈夫ですか？」椅子に縛られたロープをほどきながらティエンが言った。

「ありがとう……どうしてここが？」

「ぢるさんに感謝してください。彼女がここを突き止めました！」

「ぢるが来てるのか？……で、今どこに？」

「田中とコーヒーショップにいる筈です。心配は要りませんよ、もう公安が到着する

頃です。」

ティエンはすでにこの場所と、ぢるの所に公安を向かわせていた。

その時、外で数台の車のブレーキの音がした。

公安が到着したようである。

山田は安堵感から薄れてゆく意識の中で、ぢるの笑い顔を思い出していた……

第11話(後書き)

Miles Davis - Milestones
https://www.youtube.com/watch?v=
BeZomqLM7BQ

第12話

インターナショナルSOSクリニックのベッド。ぢるとティエンが見守る中、山田は目覚めた。

「山田さん気づいたのね！・・・よかった・・・」ぢるは山田の手を握りながら嗚咽を漏らした。

「ぢる・・・会えてよかった」

「山田さん、今先生が来ます。どこか痛いところはありますか？ティエンが心配そうに話しかけた。

「ありがとう・・・大丈夫みたいだ」

「心配したわ！もう会えないかと思った」山田の目を見つめながらぢるが言った。

顔は無精ひげが伸び、少し頬がこけていた。殴られたせいかまぶたが腫れている。

「あいつらは・・・」山田はティエンのほうを見て言った。

「公安に連行されました。田中は逃走しようとして車にはねられ重体です」

「そうか。しかし何で俺を襲ったんだ？あいつら・・・」

「山田さん。あんまり喋らないで・・・無事だったんだから・・・会えたんだから・・・」

ぢるが山田の頬を触りながら震えるような声で言った。

「ぢる・・・」山田の指がぢるの髪に触れる。

「ありがとう・・・」

1週間後、帰国した山田とぢるが江ノ島のシェリーズキッチンでデスカレーを食べていた。

「・・・山田さん・・・ひどい・・・こんなの食べれないよ」

「帰国したらこのカレーを食べたいって思ってたんだ」
そういつと山田はいたずらっ子のような顔をした。

「あのお礼にご馳走するっていうから……辛いよー」
ぢるは涙目で笑っていた。

「それにしても、あの時の50億というのが気になるなあ……」
ぢるが山田の言葉をさえぎった。

「もう忘れましょう。きつと警察が何かつかんでるわ。まかせましょーよ」

食事を終えた二人は海岸を歩いていた。

少し汗をかいた肌に海風と水面に反射する光が心地よい。

あれほどの出来事が、ずっと昔の事のように少し懐かしい感じがしていた。

> i 6 4 9 0 | 5 1 1 <

第12話(後書き)

Jeff Beck Amazing Grace Instru
mental

http://www.youtube.com/watch?v
=j9jD2tbLNDO

第13話

同時刻ベトナム・ハイフォンでは大変な事件が起こっていた。

ぢると山田が乗った車が、藤塚インターチェンジを越えた辺りで山田の携帯が鳴った。

センターコンソールにある携帯電話が青白く光っている。

「ぢる、悪いけど電話に出てよ」山田が言った。

「私が出てもいいのかしら・・・仕事の話じゃないの？」

といいながらディスプレイを見た。

「何この番号・・・84・・・ベトナムからだわ」ぢるは急いで通話ボタンを押した。

「もしもし山田さん？大変な事になりました！・・・」相手はテイエンである。

「テイエンさん？私ぢるよ、どうしたの？何かあったの？」

「ぢるさん、お久しぶりです。山田さんは？」何か緊迫したものを
感じ携帯を

山田に渡した。

「どうしたテイエン、何かあったのか？」

「杉田さんが撃たれました！」杉田は山田の上司で取締役部長である。

今回の事件と被災したベトナムの事情を考え、しばらく山田の変わりに現地を

仕切っていた。

「なんだって！？・・・それでまさか・・・」

「幸い銃弾が貫通したために命に別状はないと」

テイエンの話では、杉田が仕事帰りによく行く日本料理店の駐車場に車を停めた

ところを撃たれたらしい。銃声はしなかったという。

「テイエン君、それはプロの犯行だなサイレンサーを使っている・・・」

・・・
だとすると殺そうとしたわけじゃないな・・・多分脅すつもりなんだ」

山田は言った。普通銃はサイレンサーをつけると威力が弱まる。しかしこれが一旦体内に入ると渦を描きながら弾丸が止まる。

まず生きてはいられないはずだ。

あえて貫通しやすい場所を狙った・・・

「ぢる、暫らくベトナムに行かなければならない」

すまなさそうに山田が言った。

「わかつてる・・・でも私もついていきます。もう一人で心配するのは嫌！」

ぢるの家に着くまで二人は色々話し合ったが、渋々山田は同行する事を認めた。

3日後、二人はベトナム・フレンチ・ホスピタルの302号室にいた。

「いやあ、すまなかったね。ぢるさんまで・・・」弱々しい声で杉田が言った。

「部長良かったです、命に別状がなくて。それで・・・犯人を見たんですか？」

山田の問いかけに「部長さんまだそんな事を聞ける状態じゃないのよ・・・ダメじゃない」

ぢるが諭すように征した。

「いや、ぢるさん大丈夫だ、肩を撃たれたただだから。君達の顔を見たら

安心しちまって」

さつきまで看護婦をからかっていたという杉田の話を聞いて、二人は少し安心した。

「犯人の顔はわからない・・・夜なのにサングラスしてやがった。こっちの公安も

調べてるみたいだが、どうもプロの仕業らしい……」

車のシートに残った銃弾はワルサーから発射されたもたという。最近ではあまり使われない銃らしい。

「しかし部長、助かって良かったです……ところで部長、何故撃たれる事に？」

例のカバンと金の話と何かつながりがあるんじゃない？」「山田が監禁されていた時

中西に聞いた話である。

杉田は思い当たる事は無いという。

「部長、中国のジェイ・コーポレーションはどうなりました？」

ぢるとティエンが中西を見つけた会社の事である。

「さすがにこの国の公安も中国までは捜査出来ないらしい。中国の公安に任せてある

そうだが……実はティエンが見に行ってくれた話だと、すでに建物には誰も居ない

そうだ」

「そうですね……とにかく僕が明日から事務所に行きますから、ゆっくり休んで

ください。」

二人は杉田にお見舞いのマンゴープリンを渡すと、病院を後にした。

「せっかく二人できたんだ、何か美味しいものでも食べに行こうか？」

山田がぢるに言った。

「山田さんに任せるわ。どこか美味しいところ知ってる？」山田の左腕に

手をまわしながら、甘えるように微笑むぢるであった。

：

第13話(後書き)

George Benson - Take Five
http://www.youtube.com/watch?v=6HjZLhqoufg

第14話

翌朝、ぢるはデウホテルのレストランで一人で昼食を摂っていた。さすがに山田の仕事場に行くわけには行かない。一緒に来たのはいが言葉が

わからないので外出も不便である。昨夜レストランで山田が通訳をつけようかと

言っていたが、大丈夫だと断った。とにかくこの国に慣れなくては、とぢるは考えた

からである。ティエンに聞いた山田の計画の事はまだ本人に聞けずじまいでいる。

もしこちらで一緒に住むのなら、少しでも早く言葉を覚えたほうがいい。

「少しずつ勉強しよう・・・」ぢるは山田が使っていたベトナム語のテキストを開いた。

「すみません・・・ぢるさんですか？」

「はい・・・あなたは？」30代前半の細身の男性が声をかけてきたが会ったことが無い。

ひょっとして山田の会社の関係者か？ぢるが考えていると男が言った。

「あつと・・・すみません。私は日本の警察のものです。いやいや・・・楽にしてください

こちらでは捜査権はありませんので・・・プライベートです」

「そうなんですか・・・私に何か？」男はぢるの前の席に座り話し出した。

「実は今回の一連の事件を捜査してまして・・・ただ、あくまでプライベートですが・・・」

「どうして プライベートなんですか？」

「今回の事件はちょっとややこしくてね・・・あまり詳しくはお話
できませんが・・・」

男は竹内と名乗った。名刺は渡されなかったので本当かどうかはわ
からない。

「少しかだけお話が聞けたらと思ひまして・・・杉田さんご存知です
よね・・・」

「ええ、もちろん。杉田さんがどうしたんです？」

「実は・・・ある組織とつながりがありまして。ここからは私の独
り言と思ってください」

竹内の話では、最近国際的な麻薬密売組織が摘発されたがその直前、
預金口座が解約され

証券化された。しかしその証券を何者かが強奪した。

組織が血眼で追っていて、中国のある組織を嗅ぎつけた・・・その
組織と杉田が関係がある

のでは？　そういう内容であつた。

「いや、すみませんねこんな話を貴女にして。おっと、話しすぎた。
私はこれで

失礼します」

そう言つて竹内は席を立つた。

「ちよつと待つてください！この事は山田に言つても・・・」

ぢるがそう言いかけると「もちろんかまいませんが・・・動いたり
しては危険です

ので・・・」

そう言つてレストランを出て行つた。

夕方、山田に会うまで昼の件を話すかどうか迷っていた。

というのも、山田の性格であれば必ず自分なりに調べ出すに違いな
い。

そうなれば危険な事に巻き込まれる可能性がある。

そう考えたからであつた。シヨッピングをしたりカフェでお茶を飲
んだりしたが

そんなことを考えていたので、あまり楽しくは無かった。

「やあ、お待たせ。退屈しなかった？」山田が優しく話しかけてきた。

「あつ……ごめんなさい 気づかなかった」

デウホテルのラウンジに座っていたぢるは、あわてて山田の顔を見た。

「どうしたの？考え事？わかった何食べるか考えてたんだ」そう言っただぢるの顔を

覗き込んだ。

「そうね……何食べようかしら。フレンチがいいな」ぢるは平静を装い返事をした。

ベトナムは過去にフランスに統治されていた事があり、その影響から現在でも

すばらしいフレンチを出す店が多い。山田が案内したグリーン・タングエリンも

その一つである。

1920年代に建築された民家を改装したレストランで、メインもさることながら

デザートは芸術的ですからある。優雅な時間をすごした二人は旧市街を歩く事にした。

8時を少しまわっているが賑やかだ。道路はくもの巣のように複雑で政府が町並みを

保全しているためどの建物を見ても興味深い。

「ねえ、あそこで売ってるの何かしら？」ぢるが道路わきで絵のよなものを

並べているのを指差した。

「あれかい、あれはキャンパスにのりを塗ってそこにキラキラした金属の粉を

ふりかけて作る絵だよ。やってみるかい？」

「うん、やってみたい。面白そう。」二人は子供用のような樹脂の

椅子に座り

隣に居た地元のカップルを真似てカラフルな粉で絵を描いた。

40分ほど悪戦苦闘の末、ちよつと似ていないぢるの似顔絵が出来上がった。

それに額縁をつけて日本円で500円ほど支払う。

「たのしかったわぁ。こんなに笑ったの久しぶりよ」ぢるが大はしやぎで山田の

手を引つ張った。

「おいおい、せっかくの傑作を落とすじゃないか」山田はよろけながらぢるの肩を

抱き寄せた。

ぢるはその時、昼レストランで会った竹内の話をしないでおこうと思つた。

> i6500 | 511 <

第14話(後書き)

V a n K h a n h - T h u o n g V e M i e n D a t
L a n h
h t t p : / / w w w . y o u t u b e . c o m / w a t c h ? v
" h X R d j n P l A D s

第15話

> i 6 5 1 4 | 5 1 1 <

:

今回のぢるのベトナム滞在は2週間である。観光目的ならビザは要らない。

一度戻って身の回りを整理し、こちらに長期で滞在するつもりであった。

山田の会社に臨時雇用という形で、3ヶ月のビザを申請することになっている。

もちろんずっとホテル住まいというわけにはいかないので、手ごろなアパートを

探すつもりで山田の休みの日、不動産屋に出向いたりもした。

ぢるの帰国の日、ノイバイ空港のロビーで二人は12時50分発のCX香港行きを

待っていた。

10分遅れだそうである。

「ねえ、アパートが決まったらすぐ電話してね。荷物を送らなきゃいけないし……」

「わかったよ。でも、こちらで全部揃えたっていいんだよ。一緒に買い物するのも

楽しいんだから」

「うん。必要なものだけにするわ。なんだか楽しみ」

「メールでアパートの写真送るよ。あつ、ゲートが開いたね……それじゃあ待つてるよ。」

気をつけて……」

「ええ、貴方も気をつけて……絶対無茶しちゃだめよ」

「わかってる」

出発ゲートの前で軽く唇を交わし、ぢるはセキュリティチェックへ向かった。

振り返ると黄色いアロハシャツを着た山田が、白い歯を見せながら手を振っている。

それがぢるの見た山田の最後の姿であった。

山田の消息がわからなくなって、何度もぢるはベトナムへ行った。

その都度ティエンが力を貸してくれたが、何一つ手がかりは得られなかった。

その間に上司の杉田が警察の事情聴取を受け、中国マフィアの金の事について自白した。

杉田はジェイ・コーポレーションの闇資金を証券化する手助けをしていて、その証券を

ベトナムの中川商事ハーティン支社の金庫に隠していた。

そこは普段はほとんど使っていない建物で、売れ残りの在庫などを一時的に保管していた。

それが今回の震災で全壊し、隠してあった証券を入れたバッグごと消えたのだった。

犯人は分かっていない。50億の証券は不明のままであるらしい。その事もあり中川商事はベトナムからの撤退を決めた。

それによりティエンも解雇されたが、ぢるが訪問すれば必ず出向いてくれなにかと

協力をしてくれた。

しかし、山田の消息に関する情報はまったくと言っていいほど無かったのだ。

ぢるはひよつとすると今回の証券消失事件と山田がどこかで繋がっているのでは

ないのだろうか？そう思い始めていた。勿論現地の、公安もそうい

う方向で

捜査をしているようである。50億という金額だけにマフィアの動きも未だに

あるようである。そして1年が過ぎようとしていた……

> i 6 5 1 5 | 5 1 1 <

第15話(後書き)

Jeff Beck - Brush with the blues
http://www.youtube.com/watch?v=1yGB6d3n58&feature=fvw

第16話(前書き)

ここからは短編に無い物語が続きます。

第16話

ぢるは思い出のサイパンの海岸を一人で歩いていた。

目も眩みそうな太陽の光と、真つ白な砂浜。

コバルトブルーの海に浮かぶクルーザー。

あの時と何も変わらない風景がそこにあつた。

日本から持ってきた新聞にもう一度目を通す。

記事の文面は既に暗記しているのだが……

（中川商事のベトナム支店で行方不明であつた山田氏は、事故死していた可能性が高い

と現地警察の発表があつた。本人のパスポートや所持品が沈没していた船から発見された

らしい。氏の遺体は発見されなかったが、状況から座礁に乗り上げ、乗組員共々死亡した

ものと思われる。船は7人乗りの小型クルーザーであつた）

ぢるは信じなかつた。

信じることによって、記事が本当の事になるのが怖かつたのだ。

不思議と涙が頬をぬらすことはなかつた。

水面はあの日と同じようにキラキラと輝いている……

一つ一つの光が、たくさんの思い出を照らしているようであつた。

> i 6 4 5 6 — 5 1 1 <

そして数年の歳月が流れた……

ぢるは日常の平凡な生活を取り戻し、上司の勧めで結婚して子供も

2人生まれた。

絵に描いたような幸せな家庭ということは無かったが、優しい夫と可愛い子供たち

それに郊外の一軒家で静かな時を過していた……

そんなある日1通の手紙がぢるの元に届いた。

アメリカからのエアメールである。送り主はティエンだ。

ティエンはあの後日本の大手商社に就職が決まり、世界を相手にビジネスをしていた。

現在はアメリカのロスアンゼルス近郊に住んでいるという。

ぢるがベトナムに行かなくなってからも、山田の捜索を続けてくれており

その都度メールや電話をくれていた。

警察の発表後はさすがに回数は減ったが、それでも3年位前までは2ヶ月に一度は

連絡をくれていた。そんな彼も転勤でベトナムを離れてからは音沙汰が無くなった。

ぢるは急いで封筒を開け、便箋に書かれた手書きの文字を読んだ。

お久しぶりです。ぢるさん。

お元気でしょうか？長男の優斗君はもう1年生になったんですよ？

私は今アナハイムで暮らしています。2年前に結婚し去年の2月に男の子を授かりました。名前はチャンといいます。

来月日本に家族と旅行をしようという事になり、折角なのでぢるさんにご紹介しようと

筆を執りました。もし時間を作っていただければなら、一緒に食事でもいかがですか？

ご連絡をお待ちしております。

メールアドレス *****@*****

追伸

そういえば、例の証券の一部が換金されたという情報が入りました。詳細はお会いした時にでも……

ゲエン・タイン・

テイエン

読み終えたぢるは暫らくボーッと窓の外を見つめていた。

何度も見たベトナムの風景が蘇ってくる。

埃っぽい路地の食堂、雄大な農村の営み、突然のスコール……懐かしい思い出のなか、最後にノイバイ空港で見た山田の姿が重なる。

涙が出た……今まで一度も泣かなかったのに今日は止め処なく流れる涙を

抑える事が出来なかった。忘れようとして忘れられなかったものを、全部洗い流すように

ぢるは泣き続けた……

第16話(後書き)

Cause We've Ended As Lovers JE
FF-BECK
http://www.youtube.com/watch?v
=THnbh5lTqSY

第17話

「ぢるさん！お久しぶりですー。 ティエンです！」

「久しぶりー！こちらが奥様？初めまして。ぢると申します・・・日本語は？」

「はい。少し・・・ダイジョウブね・・・タオと言います」

「ぢるさん。これが息子です」

「チャン君よね？ 可愛い・・・」

「ぢるさん。ご家族は？」

「どうしようか迷ったんだけど・・・やはり主人にはベトナムでの事をあまり話して

いなかったから・・・」

「そうだったんですかー・・・すいません。ご家庭は大丈夫ですか？」

「ええ。今日は実家の母が来てくれてるの。それに主人は金沢に出張だから」

「久しぶりの日本は随分変わりましたね・・・」

「不景気だからねー・・・無くなった店も多いわ。日本食で良かったよね？」

「いいお店があるの！高校時代からの友人の店で・・・」

「ぢるは3人を麻布にある、てんぷら料理の店に案内した。」

「昔からの家屋を改造した店内はどこか懐かしい昭和の匂いがした。」

「ぢるさん、お子さんは優斗君だけですか？」

「もう一人生まれたのよ。女の子。彩香っていうの・・・これが写真」

「おおー・・・優斗君、随分大きくなってる！かわいいなー彩香ちゃん。2歳位？」

「もうすぐね。早いわねー時が経つのは・・・」

「ぢるさんは変わりませんね。ずっとお若い・・・」

「何言ってるんだか。さあ料理がきたわ・・・はい、ビール・・・」
「楽しい時間が過ぎていた、
帰る頃になりティエンが証券の事を口に出した。」

「例の換金された件なんですけど・・・面白いことがわかりました・・・」

「面白い事？」

「はい・・・消失した証券は複数の会社が保有しているようです。
今回は4社が関係して

いました。数年前香港のブローカーから購入したそうです」

「そうなの。なんだか不思議ね・・・こっちの中では既に終わった
ことなのに、事件は

続いているなんて・・・それはそうとベトナムには帰らないの？」

「暫らくは・・・ロスアンゼルスのはシドニーって決まってるみ
たいです。今度は

石炭の勉強しなくちゃ・・・」

「大変そう・・・頑張ってね。奥様も身体に気をつけて」

帰りのタクシーの中でざるは山田と二人で歩いたサイパンの砂浜を
思い出していた。

「未来は決められないのかな。やっぱり・・・」

それからもぢるの生活は何も変わらず平穏な日々が続いた。優斗は
大学を卒業し

自動車メーカーの開発部に所属している。妹の彩香は来年短大を卒
業する予定だ。

幸せな年月だったかもしれない。山田の面影は時にぢるを悲しませ
たが、彼の言った

ひとつひとつの言葉がぢるを勇気付けてくれるようだった。

そして更に数年の月日が経過した・・・

：

>
i
3
1
5
1
|
5
1
1
<

第17話(後書き)

D . S c a r l a t t i - S o n a t a K 1 3 G m a
j o r , S c o t t R o s s
h t t p : / / w w w . y o u t u b e . c o m / w a t c h ? v
" r q B b x J J 8 g 5 A & a m p ; f e a t u r e " f v w

第18話

> i 6 5 2 7 | 5 1 1 <

:

「お母さん誕生日おめでとうー!」

「おめでとう! ほら、由美もおめでとうって言って」

「おばあちゃん おたんじょうびおめでとう」

「まあ、ありがと。あら? 何かしら・・・由美ちゃんが作ったの?」

折り紙で作った箱を大事そうに眺めるぢるを、優斗の家族と、彩香の家族が暖かい

眼差して見守っていた。今日はぢるの53歳の誕生日を祝うため、

綾香の家族が

アメリカから帰国していた。孫は3人。どの子もぢるの子供たちに似て可愛かった。

「お母さん、お父さんが居なくなってから少し痩せたみたいだけど大丈夫?」

「全然平気よ! 今ね、近所の人たちとフリスビーのチーム作ってるの。それに高校時代の

友達と時々登山に行くのよ」

「お父さんの3回忌も終わって、気が抜けちゃって病気になるんじゃないかと心配

してたの」

「母さん、これ僕たちからのプレゼント。母さん行きたいって言うてただろ?」

「へえー・・・何かしら? ミュージカルのチケットかしら・・・」

「

封筒を丁寧に開けながらぢるは嬉しそうに笑っていた。

「まあっ・・・旅券じゃないの? こんな高いもの・・・えっ

「サイパン？」

「テイエンさんに聞いたんだ・・・母さん父さんと知り合う前にステキな恋をして

いたって・・・」

「テイエンがそんなことを・・・でも・・・何で旅券なの？」

「テイエンさんが言ってた。母さんはその恋人と約束してたんだって・・・」

30年後にサイパンの海岸を一緒に歩く・・・」
そう言いながら娘の彩香は言葉を詰まらせた。

「私ね、お父さんも好きだけど・・・そんな恋がしたいなって。高校の頃テイエンさんに

その話を聞かされてちよつと複雑だったけど・・・お母さんを羨ましいと思った」

「そして選ばれたのが僕なんですよ」笑いながら綾香の夫である庄次が言った。

「みんな知ってたの？・・・そう・・・父さんも知ってたのかしら？」

「言うわけ無いじゃん！」綾香が笑いながら優斗の顔を見た。

「俺はコイツに聞いたけどね。誰かに言わなきゃ我慢できない！とか言ってる」

「そうなの・・・でも遠い昔のお話・・・」

遠い日を思い出すようにぢるは言った。

第19話

> i 6 5 3 7 — 5 1 1 <

ハイアットリージェンシーの7階から海を眺め、ぢるは大きく深呼吸をした。

「27年ぶりなんて思えない……おんなじだあ……」
ルームサービスで頼んだ朝食のコーヒーを窓際に置くと、バルコニーに出てみた。

「いいお天気……散歩でもしようかしら……」

お気に入りの小説を持つとガーデンプールを貫けビーチに出てみた。砂の上をゆつくりと、思い出を踏みしめるように歩いていると、30年前のあの日が

まるで昨日のことのように思い出すことができる。

キラキラと反射する波がぢるの白いワンピースを揺らしていた。

ヤシの木陰からボサノバの優しい音色が聴こえる。

生演奏をしているのだろうか？近づいてみると観光客がサンデツキのベンチに寝転がって

ギターを弾いていた。

少し遠めに見ながら、ぢるは演奏の心地よさを味わっていた。

何曲か知ってる曲を弾いている。そういえば山田の趣味もギターだった。

一度はプロを目指したというその演奏を、ベトナムでもよく聞かせてくれた。

中でも彼のオリジナル曲、「木陰で」がぢるのお気に入りだった。

30年も前なのにその音色ははつきりと思い出せる……

とその時、さつきまでボサノバを演奏していた観光客が静かな曲を演奏を始めた。

麦藁帽子を顔にかけ、白い麻のジャケットを着たその男性は白髪か

らすると

60代だろうか？音が小さくなったので少し近づいて聴くことにした。

曲はミステイだろうか？少し切ない感じがする。

もう少し近づいてみる。ヤシの木を1本隔てた隣のベンチに腰を下ろしてみた。

「えっ!?!?.....この曲.....」

ぢるは突然の事に何が起こったのか理解できなかった。

あの曲だ。あの曲なのである。そう、山田がオリジナルだと言っていたあの曲.....

ぢるはヤシの木越しにその男性に話しかけた。

「すみません.....その曲は.....何という題名ですか？ 日本語解ります?」

男性は演奏をやめぢるの方を伺っている様子である。

「この曲は.....木陰でといって私の作った曲です.....」
ぢるは何がなんだか分からなくなっていた。

> i 6 5 3 8 — 5 1 1 <

第19話(後書き)

Wave

http://www.youtube.com/watch?v

= OUBN | 6MI&feature=relat

ed

第20話 完結

「そつ．．．．．そんな．．．．．そんなこと．．．」

そう言いながらざるは、ふらふらと男性の方へ歩き出した。

相変わらずベンチに寝転がり、麦藁帽を顔にかけたその男はざるの気配に気づき

上体を起こした。麦藁帽がデッキを転がり、ざるの足元で止まった。

「．．．．．山田さん．．．．．山田さんの!?」

唇は動いているが声にはなっていない。

「???. ざる．．．．．なのか?」

男はすつと立ち上がり、ざるの方へ近づいてきた。

「どうして? どうして．．．．．どうして居なくなってしまったの!」

声にならない声を振り絞るようにざるは言った。

山田は更にざるに近づき、影に触れそうな距離で話しかけた。

「すまない．．．．．まさか君がここに来るとは思わなかった．．．」

「そんなこと．．．聞いてない．．．．．どうして私の前から姿を消したの?」

「違っんだ．．．．．姿を消したわけじゃない! 記憶が．．．．．無かつたんだ．．．」

山田はノイバイ空港で別れた後の出来事をゆっくりと話し出した。

彼は50億の証券の事を知っていたのだ。山田は何度かベトナムに行くうち、山間部の

集落に学校を建てたいと思っていた。そのため自分の会社を設立し、その資金を

集めようとしていたのだ。そんな時偶然あの証券を目にした。古い商品の資料を探しに

ハーティン支社の倉庫を見に行ったとき、それほど大きく無いバッグに大量の株や証券が

入り、スチールロッカーの中に隠してあったのだ。

山田はそれをハノイの友人に預けていた。彼も学校建設の手助けを
したいといって

集まってきた仲間の一人だった。ところがその男は証券を中国のブ
ローカーに

売りさばくつもりだったのだ。男は用心深く取引現場には新聞紙の
詰まったカバンを

持って行き、相手の出方を探る気だった。ところが現場で彼は殺さ
れた。山田は友人の

不審な行動を察知し彼の後をつけ、その現場を目撃してしまった。
慌てて友人宅からバッグを運び出し、ヤンモー湖の湖畔に埋めたの

だ。

しかしあの震災で現場は湖底になってしまった。そしてこの事を嗅
ぎつけた田中等に

捕らえられた・・・

彼らが逮捕された後、今度は中国マフィアに捕らえられていた。

白状しないと命の危険を感じたが、時間稼ぎのためホアンサ諸島の
ある島に隠したと

嘘を言った。中国人マフィアは水路でその島に向かうと言い、夜の
東シナ海を高速艇で

飛ばした。そしてあの事故にあったのだ。船体は50mほど飛び上
がり船内に

居たものは全員死亡した。ボートのリアデッキに括り付けられてい
た山田だけが

偶然助かったのだ。必死で泳ぎ、小さな島までたどり着くとそこで
気を失った。

目覚めた時、記憶が無かったのだという。記憶が戻るまでに20年
の歳月が過ぎていた。

その間、彼はベトナム人として生活しており、島で漁師たちと暮ら
していた。

記憶が戻りヤンモー湖に行くと当時の水位に戻っており、防水のケースに収められたバッグを見つけることができた。いくつかは既に無価値なものになっていたが

それでも現在の価格にして30億の価値があった。それを香港のブローカーに10億で

売り、念願だった小学校を7校建設した。地元の名士として村の議員も勤め

誰も彼を日本人などと思っでは居なかった。日本へも観光で何度か来ていた。

勿論ぢるの家にも……しかし幸せそうな家庭を持ったぢるを見て、今更出て行ってどうする？そう自分に言い聞かせていたのだという。

ぢるは山田の話をずっと聞いていて、なぜあの時自分にその話をしなかったのか

何と無く理解できた。山田は自分の身の危険を感じていたのかも知れない。

それであえてぢるの前から姿を消そうと思っていたとしたら……暫らくの沈黙が流れた。

「お子さんたちは元気？ 今日夫婦で……来たの？」

「主人は3年前に肝臓がんで亡くなりました……」

「そうだったんですか……知りませんでした」

「あなたは……家族と？」

「僕は……一度も結婚はしていません。運が悪かったのかな……」

「そうなの……」

「もし……良かったら・嫌じゃなかったら……晩御飯、付き合ってもらえませんか？」

「こんなおばさんを口説くの？」

「許してくれる？　こんな僕を……」

「許すなんて……あなたは約束……ううん……未来を守ったじゃない」

「……ざる……ごめんよ。随分待たせて」

山田に抱きしめられ、ざるの手から文庫本がサンデツキの床に落ちた。

小説のタイトルはルイス・キャロルの「不思議の国のアリス」

今までの30年間で夢だったのか、それともこれから夢の中に入っ
てゆくのか……

私には解りません。でも、こんな恋があってもいいじゃないですか。
お互い好きなのに、ちよつとしたきっかけで別れていく恋人たち……

何年かすると別れた原因さえ思い出せない。もし、誤解が解けてお
互いに恋人が

居ないなら……

もう一度恋人になれるんじゃないでしょうか？

絵空事ですか？

私はこの二人のような恋をしてみたいと思います。

だって凄く幸せそうな顔をしていますよ……彼女……

：

> i 6 5 4 4 | 5 1 1 <

第20話 完結（後書き）

Jeff Beck - Another Place
http://www.youtuber.com/watch?v
=XdC6gaubOio&feature=relat
ed

「愛読ありがとうございました。」

最近恋をしていますか？

いい恋をしたいですねー

30年後・・・あなたの側に好きな人が居るといいですね。

では いずれまた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1373/>

決めたはずの未来 リファイン版

2011年7月16日17時32分発行